

野愛宕社に安置せしを、慶長六年に愛宕社別當明王院、卯辰山へ轉地の時、愛宕の社像と共に卯辰山へ移したりとのよしなり。さてその後明王院の二代祐慶といへる僧、退院の後隱居所に彼の観音を本尊となし、觀音院と號す。是より愛宕山と觀音山とて兩山に成りたり。往古は愛宕一山なりと、三壺記にいへり。又愛宕の別當所をば金澤山愛宕寺明王院と號せしも、此の舊地なる小立野本多氏の舊邸地は、今金澤神社の境内なる金洗澤の邊りにて、金澤の地名は金洗澤の地より起り、此の地邊をいにしへ金澤庄とも呼びたりといへれば、愛宕寺明王院の山號をも金澤山と號せしと聞ゆ。

○太田但馬守舊第

舊傳に、太田但馬守が舊第は廣坂の上本多氏の邸地是なりと。本多氏の傳説にも、慶長十六年吾が藩へ再勤の後、太田但馬守の舊第を賜はれるよし傳承すといへり。然れば國事昌披問答に、本多安房守屋敷は高山南坊屋敷なりと載せたるは誤なり。南坊が舊第は廣坂下疊屋橋の邊也といへり。

○太田但馬守長知傳話

初め喜藤次と稱し、實名長知、横山山城守と同名たり。父を太田彌左衛門と云ひ、芳春院君の外甥にて、利長卿とは從弟なりと、三州志にいへり。聞見雜錄には、但馬は土方勘兵衛の弟、武田宮内といふも土方弟、但馬兄なり。宮内は但馬の儀に付て牽入し、池田宮内少輔殿へ出、三千石領し、名をかへ土方備中守と云。其後佐々勘兵衛と云傍輩、備中守の噂をいひしを傳へ聞、或時城の門にて行合、勘兵衛を討果し切腹すと見ゆ、武家盛衰記にも、但馬は土方雄久の弟と云ふとあり。按ずるに、但馬守長知は利長卿の長臣叙爵四人の一人なり。求舊紀談に、利長卿御家老諸大夫前田對馬守・青山佐渡守・片山伊賀守・太田但馬守、此の四人諸大夫に被仰付由横山山城申。と見ゆ、村井長明の自筆本陳善錄に、肥前様宰相に被爲成時、太田兵庫但馬守に、片山内膳伊賀守に罷成。とあり。今世上に流布する夜話錄に、此の事洩れたるに依つて、三壺記等にも記載せず。故に三州志等にも、叙爵の人とせざりしと聞ゆ。さて可觀小説に云ふ。太田但馬關原以後、江戸への御使相勤。土方勘兵衛は但馬の實兄なり。勘兵衛江戸に相詰居候故、旁以被遣

候。東照君殊之外御懇意にて、淺井繩手合戰之事など御尋被成、御馳走大形ならず。御馬・御腰物等被下候。此段瑞龍公御聞、如何御思召候哉。此以後横山大膳・山崎閑齋兩人に被命殺害被成候。但馬判形之紙面二通、今以江州今津甚四郎家に有之、拔群見事成筆力目を驚し候。といへり。按ずるに、但馬守殺害の主意傳説種々ありて、異論紛々たりといへども、村井長明が象賢紀略に、太田但馬守大正持御陣より三年の間利長様御前出頭、中々かたを並るものもなく、大正持城御あづけ一萬五千石、扱又城料と御意候て五千石、合二萬石被下、三年目の五月十七日に金澤城にて横山大膳に被仰付御成敗、色々さまざま之儀後に聞え申候。第一は御手かけ衆おいまをはじめ、中使彼是五人めをぬかせられ、御家中人持衆十人許に御みせ候。其時篠原出羽へんじ門をは入申時分、氣分を後までほめ候。と載せたり。是殺害を命ぜられし趣意なるべけれど、態と内實の事は記載せざりしにや。故にその主意は判然せざれど、三壺記に、太田但馬は度々の覺の者にて、御前躰も宜しかりけり。折節但馬居屋敷の露地の内にて狐の子を狩出しとらへ、色々

なぶりさけばせければ、親狐とおぼしくて、塀の上にあがり身をもだえてさげびけり。但馬猶面白くおもひて、脇差を抜きひたなぶりにして、終になぶり殺し捨ければ、親狐是を恨にや思ひけん、いづくともなく失けるが、夜々來てさげびけり。或時御城内御能の刻、奥方の女中の内に、但馬を見そめて、偕々器量の能き大名哉と事の外譽なし、能よりは但馬に目を付けまもりけるを、出頭の女中方是を見て、密々御耳へ入奉る。誠に女はつれなき心中哉。彼但馬を譽たる女房御前うとく成、心に懸り有ける處、太田但馬曉方女中の局の縁通りを、忍びて塀を越出けるを、利長卿一兩度も御覽有しとかや。利長卿悪き次第と思召、山崎閑齋と横山大膳に仰付られ、但馬を討取可申旨、日限を極め支度をいたし、登城して但馬登城を待居たり。閑齋は時取失念せしにや遅参に及ぶ内、但馬登城し、御式臺を過、廊下より御廣間へ出る所を、横山大膳上意なりとて打ければ、半袈裟に切られながら心得たりと抜合ける。勝尾半左衛門門合て助太刀して、横山打留たり。利長卿御感有て、但馬死骸をば本丸と二丸との間なる極樂橋の爪に置せられ、主